

た、冬ともなれば零下三〇度以上もする寒さだ。寒いというより体が痛い感じだ。

昭和二十二年五月、待ちに待ったダモイの日が来た。喜びいっぱい我々を乗せ列車は東に向かって走った。シベリア本線を五日ほど走ったようだが、列車はナホトカに到着した。日本船が同胞をいっばいに乗せ港を出て行く。「俺たちもすぐ帰れる」と思っていたら、山奥の収容所に入れられてしまった。ソ連側の言うことなど信用できるものではない。材木運搬等の強制労働を強いられ、一年余り足止めを食ってしまった。ナホトカは民主運動が盛んだった。うっかり反対もできない、帰るまではと何事も耐え忍んだ。

昭和二十三年六月中旬、本当に帰れる日がきた。船員さんたちの心のこもった言葉に迎えられる船に乗り込んだ。「恵山丸」という船だった。船はナホトカの港を後に日本海を越え、舞鶴に入港した。昭和二十三年六月十八日だった。生涯忘れ得ぬ感激の日だった。思えば長い長い月日だった。懐かしい我が家に戻れば、出征中生まれた長男も五歳になっていた。

シベリア抑留記

岐阜県 小栗 晴美

在満当時、昭和二十年二月渡満、黒河省孫呉第二三師団通信隊に入隊、昭和二十年八月終戦となる。

シベリア抑留―昭和二十年九月入ソ、ライチハ収容所に入る。以後、その収容所の食事の貧困、極寒、重労働のため、弱栄養失調となり、サビタヤ病院に入院、二月末に退院したが、重労働に不適となり、支所のソホーズの農場に送られた。冬場は軽作業であったが、夏場は干草の草刈に行き、ライチハ以上の重労働であった。それに比較的軽い労働のじゃがいも、きゅうりなどの収穫と組合わせて作業をしたので、この間に若干体力を回復させることができた。

昭和二十四年九月初め帰国命令によりハバロフスク、ナホトカ經由舞鶴に九月二十四日ごろ上陸、帰国した。帰国後、一番困ったことは、赤のレッテルをはられ

て就職できずに苦勞をした。

現地では種々なことがあった、山から木を切ってきて、自分たちで兵舎を建てた。暖房など勿論なく、外套を着たまま眠る毎日であった。食物はパン一切、汁は塩スープ一ぱい、これでは栄養失調にならないのがおかしいくらいであった。モロコという魚をとって食べた。食べられると思うようなものは、何でも食べた。生の馬鈴薯のにかかったことを今でも時に思い出す。病気で入院しても、薬などなく、ただ寝ているだけ。これでは治る病氣も、治るはずもない。沢山の戦友が死んでいった。何とかこれらの人々の供養をせねばいけないと思ひながら、それが果たせず胸がいたむ思いである。

シベリア抑留記

京都府 吉田 静

職 業 農 業

生年月日 大正十一年九月二十二日生

現住所 京都府船井郡丹波町字院内小字市庭一四番

地

元陸軍一等兵

満州国吉林省敦化県青溝子開拓団桃源郷にて昭和二十年五月一日、召集をうけ、満州国チチハルの部隊へ入隊する。当時独身。

昭和二十年七月十日、満州国の首都新京特別市守備水島部隊へ転属する。それより八月十五日の終戦まで市内主要道路にソ連戦車を防ぐ壕掘りとタコツボ掘りを行う。作戦としては侵攻してくる敵戦車が壕に遭遇して立ち往生するところをタコツボに隠れている兵が爆雷を抱えてキャタピラの前へとび込み爆破するとい